

令和 5 年 5 月 22 日現在

機関番号：15401

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12598

研究課題名(和文) ケアの論理を通じた 自然=社会 性と主体性の再検討

研究課題名(英文) Rethinking nature-sociality and subjectivity through the logic of care

研究代表者

松嶋 健 (Matsushima, Takeshi)

広島大学・人間社会科学研究科(社)・准教授

研究者番号：40580882

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：「近代」というプロジェクトが地球的危機をもたらしているのが明白になった今、自然と人間、自然と社会を二分する近代的思考の枠組自体を問い直す必要がある。本研究では、社会的に困難を抱える人たちが集う共同体の現地調査を通じて、そこでの「ケアの論理」の実態について具体的に明らかにするとともに、「自然=社会」における主体性と自律性について国際シンポジウムや論文として発表し、一定の承認を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

精神的な病理や生きづらさと、労働や組織の問題、自然環境の問題は別々の問題ではなく一連なりの問題であり、本研究ではチーズ生産を軸とする共同体の事例からこれらを同時に捉える視座を提示し、論文や書籍、シンポジウム報告のようなかたちで発表した。これは、人間を起点に置き、そこから物事を解釈したり、プロジェクトを行なうという「近代」の前提を学術的に問い直すとともに、その前提で作られている社会での標準的な生き方とは異なる生き方の可能性を提示することで、「自己決定」や「自己選択」とは別の論理にもとづく社会の可能性についての議論を開いた。

研究成果の概要(英文)：Now that it has become clear that the project of "modern" has brought about a planetary crisis, it is necessary to reexamine the framework of modern thinking itself, which divides nature and human, or nature and society. In this study, through field surveys of a community where people with social difficulties live together, I showed the reality of the "logic of care" in concrete terms. I have presented my findings on subjectivity and autonomy in "nature=society" at an international symposium and as papers, which have received a certain recognition.

研究分野：文化人類学

キーワード：ケア 発酵 微生物 ナチュラル・チーズ 自然=社会 性 自律性 環世界

## 1. 研究開始当初の背景

文化人類学は近年、人間が世界をどのように意味づけているかを研究する人間中心主義的な視座から、人間以外の生物を含む自然と人間が相互に絡み合うなかで自然=社会複合体としての世界を生み出し、そのなかで生きている様態を捉えようという方向へと大きく転換を遂げつつある。この転換は、人間主体の諸機能とその対象領域を軸に制度化されてきた人文・社会科学を、「生きている存在」の学として構想しなおす広範な諸学の生態学的転回のなかの一つの重要な核となっている。

一方、人類学の下位領域としての医療人類学の最近の研究では、ケアの実践をケアする者/される者という二者関係を包含する、より広い関係性の場のあり方が注目されている。ケアの場は、病院などの臨床現場に限られるのではなく、生活の場としての地域の広がりの中にあり、そこには、家族や地域住民など他の人たちの関係性や制度、テクノロジーの他、人間以外の生きものや死者、想像の存在などとの関係も含まれる。

こうした学術的な潮流は、人間を中心にすえる「近代」というプロジェクトがもたらしてきた帰結が、「人新世」という新たな地質年代の呼称とともに地球的危機として認識されつつあることと軌を一にしている。気候変動をはじめとするいわゆる環境問題は、自然環境の問題にとどまるものではないため、自然と人間、自然と社会を二分する近代的な思考の枠組みを残したままの技術的アプローチだけで解決されるような問題ではありえない。それは、自然と人間、自然と社会を分けて考える認識論的・存在論的前提自体の問題であり、病理でもある。そこでこうした近代的な思考の枠組み自体を問い直す火急の、また根源的な学的要請が生じていると言えよう。そこで、具体的な現場でのフィールドワークから、こうした問題にアプローチすることが人類学研究においても必要であると考えられたのである。

## 2. 研究の目的

人間(精神)を自然から区別し、一方を主体化するとともに他方を客体化し、それを純化していくという近代のプロジェクトを問い直すためには、通常のエコロジー的アプローチではなく、環境・社会・精神にわたるエコロジー的(エコゾフィー的)アプローチが必要となる。それを具体的に探究するために、本研究では以下のような目的を立てた。

- (1) 現在の社会で生きる上で様々な困難を抱える人たちが共同生活を行なっている共同体が、どのような論理にもとづいて営まれているのかを明らかにすること。
- (2) 都市での賃金労働とは異なる仕事が、何に依存しており、どのようなかたちでの相対的な自律性を有しているのかを明らかにすること。
- (3) 現場での上記に関する調査にもとづき、自然と人間、自然と社会を分離しない絡み合いのなかでの自律性と主体性のあり方について人類学的観点から考察すること。

## 3. 研究の方法

- (1) 現在の社会で生きる上で様々な困難を抱える人たちが、有機農産物とナチュラル・チーズを生産し販売しながら共同生活を行なっている北海道の共同体でのフィールドワーク。
- (2) 医療や看護の領域での研究から出てきた「ケア」の概念を拡張し、ケアを自然環境にとどまらない環境としての「環世界」のなかで捉えるための文献研究。

## 4. 研究成果

新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、なかなか現地調査を行なうことがかなわず、二度の研究期間延長を余儀なくされたが、最終年度に実施することができた。そこから見えてきたのは、土壌、草、牛、乳の循環に依存しながら品質の高いナチュラル・チーズを生み出すことが、人間によって人間だけで主として構成された賃金労働とは異なるリズムを持ちながら、市場を通してニッチを作り出し、相対的な自律性を実現している生のあり様である。こうした「仕事」は、生きた自然の要請にもとづいて行なわれるため、人間の精神へのダメージが少ないと考えられる。

また、高品質のチーズを作るために土壌、牧草、牛に対してなされるケアは、同時に人間が生きる環境に対するケアでもあり、とりわけ発酵過程の制御から見えてくるのは、害をなす微生物を排除するのではなく、いかに害をなさない状態にとどめておくような環境をつくるかと

いうことである。医療や福祉に関わる研究では、ケアは二者間の関係性のなかで捉えられることが多いが、ケアの論理が働きやすいのは複数性と多様性の場であり、そこでケアをすべきなのは、対象となる相手そのものというよりも自己と相手の双方を含んだ環境ということになる。そこから、無殺菌あるいは低温殺菌の乳から高品質のチーズをつくることと、社会的に疎外された人々を排除しないで共に生きることは、ズレを孕みながらもパラレルな過程であることが見えてきた。そこで働いている「ケアの論理」について、複数の論文や共著書において発表することができた。

また、主要な研究テーマであった「主体性」をめぐることは、現代の産業社会での賃金労働から外れたところでなされる「仕事」が何に依存し、それがどのような自律性をもたらしているかを検討した。この点については、2023年3月の国際シンポジウムで研究報告を行なった。さらに、生物学者ヤーコプ・フォン・ユクスキュルが構想していた人間と人間以外の生物の両者を包み込む「自然の主体性」についての論文を執筆し、こうした「自然の主体性」概念を、近代の人間中心の強い「主体性」の概念と交錯させることで、自然=社会における主体性についてさらに探究をすすめていく端緒となる成果を挙げることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 松嶋健	4. 巻 21-2
2. 論文標題 コスモポリティクスとしての民族精神医学	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 こころと文化	6. 最初と最後の頁 146-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松嶋健	4. 巻 1
2. 論文標題 精神医療改革運動からテレストリアルケアをめぐり 政治ヘーイタリアでバザーリアとコロナが教えてくれたこと	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 精神医療	6. 最初と最後の頁 62-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松嶋健	4. 巻 増刊12号
2. 論文標題 主語的公共空間から述語的つながりの場へ ト라우マとケアをめぐり人類学から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 125-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松嶋健	4. 巻 48巻10号
2. 論文標題 イタリアにおける医療崩壊と精神保健 コロナ危機が明らかにしたもの	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 117-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Takeshi Matsushima
2. 発表標題 Autonomy of contemporary ie in a more-than-human world
3. 学会等名 Family Potential in Uncertain Times
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松嶋健
2. 発表標題 臨床心理の外に出る－生きることの共同性に向けて イタリアの精神医療改革に学ぶ
3. 学会等名 日本臨床心理学会第58回大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松嶋健
2. 発表標題 コスモポリティクスとしての民族精神医学
3. 学会等名 第28回多文化間精神医学会学術総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Takeshi Matsushima
2. 発表標題 Non ci credo, ma metto la maschera. Un'osservazione antropologica sul jishuku dei giapponesi ai tempi del Covid-19
3. 学会等名 Societa italiana di antropologia medica（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 松尾瑞穂・松嶋健・宇田川妙子・深川宏樹・白川千尋・山崎浩平・深田淳太郎・新ヶ谷章友・松岡悦子・ジェイコブ, コープマン・ドワイバヤン, バネジー	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 370
3. 書名 サブスタンスの人類学—身体・自然・つながりのリアリティ	

1. 著者名 青木恵理子・岡部太郎・松本拓・山崎浩平・舟橋健太・白川昌生・くるみざわしん・松嶋健・山田創平	4. 発行年 2022年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 198
3. 書名 アートの根っこ	

1. 著者名 石井 美保、岩城 卓二、田中 祐理子、藤原 辰史、松嶋 健、立木康介、篠原雅武、ホルカ・イリナ、大浦康介、森本淳生、山崎明日香、松村圭一郎、能作文徳、岡安裕介、唐澤太輔、田中雅一、橋本道範、武井弘一、井黒忍、池田さなえ、瀬戸口明久、近藤秀樹	4. 発行年 2021年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 478
3. 書名 環世界の人文学 生と創造の探究	

1. 著者名 鎌田 東二、熊野 宏昭、林 紀行、井上 ウィマラ、稲葉 俊郎、藤守 創、河合 俊雄、阪上 正巳、古谷 寛治、町田 宗鳳、柿沼 敏江、藤枝 守、松嶋 健、今福 龍太、安田 登、西平 直、ベルナルル・アンドリュウ、金 香淑、アルタンジョラー、島園 進	4. 発行年 2021年
2. 出版社 日本能率協会マネジメントセンター	5. 総ページ数 624
3. 書名 身心変容と医療 / 表現 近代と伝統	

1. 著者名 田中雅一、松嶋健、小田博志、酒井朋子、三田牧、青木恵理子、マヤ・カハノフ、窪田幸子、富田暁、岡田浩樹、北岡一弘、武田龍樹、吉田尚史、アナ・カーデン=コイン、藤原久仁子、中村平、松田素二、福浦厚子、ニコラ・タジャン、兼清順子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 593
3. 書名 トラウマ研究2 ト라우マを共有する	

1. 著者名 松村圭一郎、中川理、石井美保、松嶋健、中空萌、山崎吾郎、久保明教、渡辺文、深田淳太郎、佐川徹、高田明、高橋絵里香、猪瀬浩平	4. 発行年 2019年
2. 出版社 世界思想社	5. 総ページ数 215
3. 書名 文化人類学の思考法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------